

「成功」でなく「成長」

2023・2・15 重枝 一郎

みなさんも知っての通り（？）私は数学科の教員である。サッカーの先生ではない。ただ、サッカーの指導を通して教育について学ばせてもらったことが経験資産になっている。それは、選手の「成功」というより「成長」できる学びの環境づくりにおいてである。今でこそ当たり前のように知られているが、教育界でコーチングという言葉に耳にしないう頃「ティーチングでなくコーチング」を意識するようになったのもサッカーの指導経験のおかげである。動きを止めてしっかり話を聞かせる「フリーズコーチング」、動いている状態で声かけをしていく「シンクロコーチング」は、教科指導でも学級指導でもつながった。

サッカー部の生徒には、個々の1日をデザインする力をつけていくことを意識させていた。部活動の時間は60名くらいの部員がいた学校の場合は約2時間、部員数が少ない学校の場合は約1時間、一度も朝練はしたことがない。限られた時間で個人としてチームとして何をすべきか「考える」ことを習慣化し、主体性を育むことを目標にしていた。この目標が、「成功」より「成長」ということにつながっていくと考えていた。

練習や試合をする際、その時間の目標をみんなで共有することが一番大切であり、教育効果を上げると考えていた。このことは教科の授業でもつながった。1コマの授業における目標は「めあて」とよく言われる。その時間の「めあて（＝ゴール）」を共有し、マインドセットすることが授業の効果を生む。

生徒は、1日をデザインすることで、食事、休養のための時間や自学したり、家族と過ごしたりする時間を意識するようになる。すると生徒は、普段の生活の中でも、自分の考え、自分の夢をもち、そのための時間の使い方を考え、夢中になって努力するようになる。そして、最後まであきらめない「心」の才能を磨いていく。まさにキャリア教育につながった。

1日をデザインする力を育むためにポイントとなるのは、「こんな24時間にしたい」「こんな生き方をしたい」というイメージになる。そこから夢中になる力が生まれ、イメージの実現につながっていく。また、一番近くにいる大人が最初の教育者になる。そういう意味では教育のスタートは家庭になる。そこから学校・地域社会に流れてくる。関わる人間がどんどん重なり合う。これもキャリア教育と言える。

以前（？）スポーツの指導の世界で「体罰」や「暴力」の問題を耳にした。その要因として、選手たちを中心に置かない価値観がある。「プレーヤーズファースト」の深い自覚なしに、恐怖や痛みによって選手を手を取り早くコントロールしようとする指導者がいる。組織の論理が個人を踏みにじる構図といえる。人間の脳には、大脳辺縁系という本能的な行動をつかさどる部分と、理性の源になる大脳新皮質と言われる部分がある。恐怖や痛みで人を支配しようとするのではなく、大脳新皮質つまり理性や感性に働きかけて「成長を促す」のが教育である。

サッカー・授業等の指導をする中で、選手・生徒の「できない」を「できる」にするためのサポートは、選手・生徒の自信を育てる。もしなかなかできるようにならなくても、私たちは我慢と情熱は失わないようにしなければならない。それが学びの環境づくりにつながる。

人は「安全・安心・安定」の3Aと言われる所に集まる。不安や恐怖しかないところで選手たちが上手になるのは、大きな「はい」の返事だけである。

私たち教師は、うまくいなくても、「もうダメだ」ではなく「まだダメだ」と考えることを習慣化し、我慢と情熱をもって学び続けなくてはならない。

「変化の先に進化あり」